

言葉の深みへ

詩を読む、詩を書く

ちようど三十歳になったころだった。自分から言葉が離れて行く、そんな感触を味わったことがある。当時勤めていた会社で、新しい、当時の私にとっては、とても大きな仕事を任されて浮き足だった状態だった。

思い出すのも嫌な自分がそこにいる。自分は何ができるのかということばかりを考えていて、何を成さねばならないかをほとんど考えていなかった。心は自分の願望で一杯だった。成し遂げたいと思うことで心は埋め尽くされていた。

〔中略〕

あの頃の私には、慈しみも他者へのいたわりもなかった。自信と呼べるようなものも、全く感じられていなかった。他者を信用する以前に自分を信じられていなかったのである。だが、最も欠落していたのは祈りである。人生の声を聞くことができなくなってしまっていた。

生きるとは、人生とは何かを問うことではなく、人生からの問いに応えることだと『夜と霧』の著者ヴィクトール・フランクルは言った。人生は、答えを出すことを求めない。だが、いつも真摯な応えを求めてくる、というのである。人生はしばしば、文字にできるような言葉では語らない。人生の問いと深く交わろうとするとき私たちは、文字を超えた、人生の言葉を解く、内なる詩人を呼び覚まさなくてはならない。

『悲しみの秘義』より



若松英輔氏講演

若松英輔（わかまつ・えいすけ）

批評家・随筆家。1968 年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。2007 年『越知保夫とその時代 求道の文学』にて三田文学新人賞を受賞。

2016 年『叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦』にて西脇順三郎学術賞を受賞。著書に『井筒俊彦 叡知の哲学』（慶應義塾大学出版会）、『イエス伝』（中央公論新社）、『小林秀雄美しい花』（文藝春秋）『魂にふれる 大震災と、生きている死者』（トランスビュー）、『涙のしずくに洗われて咲きいずるもの』（河出書房新社）、『生きる哲学』（文春新書）、『霊性の哲学』（角川選書）、『悲しみの秘義』（ナナロク社）、『内村鑑三 悲しみの使徒』（岩波新書）

『生きていくうえで、かけがえのないこと』『言葉の贈り物』『詩集 見えない涙』（亜紀書房）など多数。

主催：京都暁星高等学校PTA

日時：4 月 29 日（日）10:40～12:10

場所：京都暁星高等学校

お申込み・お問い合わせ TEL:0772-22-2560 e-mail:info@kghs.ed.jp